

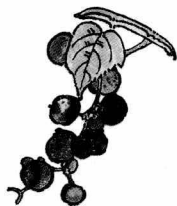
久保田正文

現代短歌往来



現代短歌往来

久保田正文



筑摩書房

現代短歌往来

一九八八年九月十日 初版第一刷発行

著者／久保田正文

発行者／関根栄郷

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話東京二九一―七六五―(営業)

二九四―六七―(編集)

振替東京六一四―二三

郵便番号一〇―一九一

印刷／明和印刷 製本／積信堂

©久保田正文 一九八八
落丁・乱丁本はお取替致します

目次

	言文一致のうた	3	混沌の娘たち	29
	主張・訴え・怒り	5	『金子文子歌集』より	31
	本歌とりのこと	7	国鉄の歌人たち	33
	わななき	9	布施杜生リアリズム	35
	新井洸における自然と人間と	11	金大中氏事件	38
	新聞歌壇垣のぞき	13	石川一雄の短歌	40
	闇のかなしみ	15	番外	42
	まぼろしの歌集―稲森宗太郎「水枕」	17	牧水・芳水	44
	子供をうたう	19	上の上	46
	ひとつの灯	21	著作権について	49
	あなかしこ	23	文芸委員会騒動	51
	稲森宗太郎・ふたたび	25	昭和八年のうた	53
	歌人と学者	27	ほほずきを鳴らす女	55

	立原正秋の和歌												
	『アララギ』時代の大家金之助												
	へいんへについて												
	高群郁追悼												
	へみぎへについて												
	国語を奪うもの												
	『審美歌篇』頌												
	助動詞のこと												
	鉄道機関士のうた												
	水野葉舟のうた												
	松浦辰男のうた												
	ロボットをうたう												
	地下足袋のうた												
84		82	80	78	76	73	71	69	67	64	62	60	58
	生活から思想へ												
	チモールのうた												
	五味保義と龍膽寺雄と												
	『星夜』独断												
	表棹影の短歌												
	過ぎにし人												
	伊藤千代子のこと												
	室生犀星のうた												
	書齋的メランコリア・その他												
	渡辺直己のうた												
	大正期の尾山篤二郎												
	明治の青春―山川登美子												
	人生に取組む『浅見淵の歌』をめぐって												
113		111	109	107	105	102	100	98	96	93	91	89	87

		求心力と遠心力―小熊秀雄の短歌	115	再説・ラ行下二段活用	143
		青山榛三郎『山と太陽』より	117	火をふきし山のあと	146
		村山槐多のうた	120	竹久夢二のうた	148
		告ぐべきやわが癌のこと	122	大橋松平のうた	150
		岡田真『市井集』より	124	初期 太田水穂	152
		シヨオペンハウエルと笛	126	高田漣五郎のうた	154
		佐々木妙二氏をはげます会席上	128	大野誠夫における〈青〉	156
		子規の駄作	130	島本久恵と江口きちと	159
		守屋一郎のうた	132	長谷川銀作へさうですか歌	161
		違星北斗のうた	135	初期 今井邦子	163
		こころやさしきうた・高安国世	137	『斎藤茂吉短歌合評』一隅	165
		穂積忠のうた	139	藤沢周平『白き瓶』をめぐって	167
		わが収容所列島のうた	141	詩集『編笠』から	169

EUPHUISM

	まぼろしの一首―依田秋圃	174	内面的に生活的なもの―松倉米吉	201
	再説・まぼろしの一首	176	土岐哀果と大逆事件周辺	203
	内田穰吉詩集	178	中津賢吉の戦争詠	206
	三ヶ島葭子『吾木香』	181	『ソライロノハナ』ふたたび	208
	交流と反撥と	183	「短歌への訣別」と「安曇野」	211
	奥田美穂・今村治郎	185	南原繁「形相」について	213
	萩原朔太郎の短歌	188	木山捷平のうた	215
	岡千里のこと・ふたたび	190	松田常憲の長歌	217
	大逆事件をうたう 1	192	北原白秋の戦争詠	219
	大逆事件をうたう 2	194		
	Homage のこと	197	あとがき	222
	水上滝太郎・堀口大学・岡千里	199		

装画
生井巖

現代短歌往來

言文一致のうた

前口上。これからしばらく、明治以後の短歌の大森林のなかを、勝手気ままに往来して、そのときどき、その一首ずつに思いつくこと、感ずることを、とらわれないで書きつづることにする。往来とは言っても、当世流行の文学散歩ふう名所案内のようなものではない。それだから、いつ、どこへ行くかというスケジュールもない。時代別、作家別、流派別などということにいいささいこだわらない。ときに着ながし下駄ばきで、ふらっと出かけるかもしれないし、ときにはすこし足かためなどして、いでたつかもしれない。さて、どこまでつづくぬかるみぞ。

ウメニキテミ。藪ニマドヘド。鶯ノナカナイトキハ。サテナカヌワイ

林 麿臣

言うまでもなく、斎藤茂吉が、「明治大正短歌史概観」で紹介しているうたで、『東洋学会雑誌』（明治二十一年三月刊、第二編五号）に発表された「待鶯」と題する〈言文一致歌〉の一首。へ竹の林梅の園にも鶯のなかぬ時にはなかぬなりけり」というもと歌を、言文一致にうたい替えられたものとされている。もと歌の作者は明らかでない。ともに、林麿臣かもしれない。斎藤茂吉は、おなじ章でさらに、「新樹」「郭公」「樹下納涼」「寒夜月」の四首をも記録している。これらの歌、その発表された雑誌を教えてくださいのは、柴生田稔であると書いている。昭和六年の執筆である。

こういう勇敢な実験を、私じしんも勇敢に肯定し、支持するものである。『古今集』時代からの動脈硬化は、こういうところから、すこしずつ破られはじめるわけである。六年以前の『新体詩抄』の実験も、〈詩〉としては、この程度のものであった。文語体、七・五調を破りえなかつたあの詩集にくらべて、林麿臣が口語体・言文一致体を思いきってえらんだところは、さらに革命的であつたとさえ言ひうる。

これらのうたが発表された翌年、正岡子規は、つぎの一首をつくつてゐる。

ここに消えかしこにできて物質のへりもせずまた加はりもせず

もつとも、この一首については、さすがの子規も『竹乃里歌』にはいれなかつた。「読書弁」と題する文章に書きとどめてゐるのみである。

ペラボーめくそをくらへと君はいへど（こん畜生）にわれならなくに

これもおなじく子規の、明治三十一年三月二十六日附で、天田愚庵にあてたがみのなかにみえるうたである。

これらのうたは、型破りなどという恰好のいいものではなく、なんともいえずメチャクチャなものである。アウト・ロウふうくに、蛮勇をふるつてゐるようなものである。

林麿臣は、専門歌人としてはアウト・サイダーにすぎなかつたにしても、そういう作者の言文一致歌のこころみを含め、正岡子規の、人びとから見落されがちなこれら奇矯な作に進み出た蛮

勇を、明治の短歌革新のエネルギーの源泉のひとつと、私はかんがえたい。

主張・訴え・怒り

被支配のわが血わが意志枉げざりき刻むやまとのことのはを見よ

尹 政 泰

『書かれざる意志』所収。〈強制連行の裔なるわれの武器として鋭く磨けヤマトコトノハ〉という作品も録されている。作者はもちろん在日朝鮮人であるが、伝はよくわからない。後記から推すと、昭和五十一年には二十代の青年であったようである。その年までの作品を集めているようである。

怒りとうったえに充ちた作品にあふれ、しばらくぶりによみごたえある集にめぐりあった。文
学においてはすべて、作者の主張を含む作品を私は重くみる。特に現代にあつては、われわれの
生活の現実のなかに怒りたいこと、プロテストしたいことがいっぱいあるはずである。芸術諸ジ
ャナルのなかでも、文学は特にそれへ直接していいはずである。その意味で、小説や詩において、
在日朝鮮人作家の仕事は近年目立ちはじめている。短歌においてもようやくこの作者があらわれ
た。〈朝鮮の穀物奪い樹を奪い犯したりにき侵略者うぬら〉などという作も見のしがたいが、

ころざし今に流々たり両眼を刺され売らるる目刺の類

という一首などを特に注目する。

わが血わが意志にかけて、ヤマトコトノハを磨こうとした二十代の在日朝鮮人青年の成果はじつにみごとであるが、しかしコトノハの磨きに、磨き過ぎがあるのではないかということも感じた。たとえば、〈雪炎に昏くかすみて祖国あり瘦狗たるとも走狗たらざれ(金芝河へ)〉のごとくである。うたわれていることはよくわかり、つよい共感をもつが、ここに現われた語呂あわせのような技巧が、集中、他に多く見られる。〈此岸―彼岸〉〈死岸―志岸〉〈地―血〉〈悲―火〉〈ドンプリードブロック〉などかなり魅力的でもあるが、同時にそれらは一種の同音反復美文主義のようなものに傾いてゆく危険はないか。ことば・音の美しさにとられることに、ヤマトコトノハの練達を誇る道は、古今集―新古今集美意識へつながるのではないか。へ一天を指しながら紅一点 再点 点と佇ちいるポスト〉などという、あそびのような一首も録されている。

〈鮮人〉という語を詠みこんだ作が八首くらいあるのにも気づいた。〈鮮女〉という語をつかった作も一首ある。〈朝鮮人〉ということばをつかった作は一首だけである。〈半島〉という用語もある。

朝鮮国のことを〈半島〉と言ったのは、日本帝国主義的侵略時代の用語であると、金達寿が一九五〇年ごろ激しく怒ったのを私は忘れることはできぬ。〈鮮人〉〈鮮女〉に至っては、いよいよ金達寿を怒らせるのではないか。尹政泰が、あえて歌語としてそれらをつかったのは、アイロニ

イの効果をねらっているのであろうか。その効果は実現されているのであろうか。

本歌とりのこと

たゆみなき理科の時間に記したりき筵を引きずる藤浪の花

土屋 文明

これは、いわば孫引きのようなものである。清水房雄が、「わかる・わからぬ」(毎日新聞、昭和五十四年七月二十一日)であげている。「青南集」にある、昭和三十年の作という。私といえども、その歌集をもっていないわけではないから、物置きの本棚まで行けばいいのだが、なにしろ夜更けで、しかも名だたる熱帯夜というやつである。木俣修に、〈書庫にゆくこともものうし暑きひる小^ちさき辞書にてことを果しぬ〉という一首がある。

閑話休題。清水房雄の言っているのは、文明のこの一首は、正岡子規の〈松ながら折りてさゞげし藤波の花はむしろを引きずりにけり〉に關係しているはずで、〈子規の歌を知らないと、この一首のかなり大切な部分が受け取れないだろう〉ということである。おなじような例として清水房雄は、島木赤彦の〈山深く起き伏して思ふ口鬚の白くなるまで歌をよみにし〉と、土屋文明の〈口髭の白くなるまでと歎きにき歌にもならぬ老をいかにせむ〉との關係もあげている。

そこで、誰しも思うだろうが、私じしんもなによりもまず感じたことは、「古今集」、「新古今

『集』大流行の現代、本歌とり技術は、いよいよ『アララギ』派長老にまで及んだかということである。平安朝歌風を徹底的に否定した根岸短歌会——『アララギ』派にも、一世紀ちかく経つとこ
ういう変化があらわれるのかとおもった。

もつとも、清水房雄はそれを、本歌とりというふうにはかんがえていないらしい。へそれら条件をぬきにしては、完全な味読は難しいが、また思うに、それを知らなくても、わからぬところはわからぬままに、それなりの程度に味わえぬというものでもない。ここらあたりが、韻律を具有する表現の徳というものかも知れないと、清水は書いている。

正岡子規に、（真砂ナス数ナキ星ノ其中ニ吾ニ向ヒテ光ル星アリ）という明治三十三年作の一首のあることはよく知られている。そして、斎藤茂吉に、大正一年の子規忌の作として、（光りつつ天を流るる星あれど悲しきかもよわれに向はず）という一首がある。茂吉が、明らかに子規の吾に向ひて光る星を意識してつくったことは、詞書からも知られる。ここでの、茂吉と子規とのかかわりは、本歌とりというふうなものとはかなり異なつて、茂吉が、子規のあの一首によく傾倒していたことを、そして茂吉が、じぶんの時代を、子規の時代よりは、時代そのものとしての一種の衰弱として認識していたことを表現しているだろう。

平安朝歌人の本歌とりは、知的な、などというふうな高級なものではなく、情熱を喪失した記憶力の遊び・ひけらかしあいのようなものになつてしまつた。衰弱の自覚さえ、そこにはない。それに対比すれば、土屋文明のばあいもやはり、子規や赤彦に対する敬愛のようなものがモティーフにあつて、単純な本歌とりとは異なるかもしれない。